

「備えをせよ — 谷を掘りで満たせ」  
コナーズビル インディアナ州 アメリカ合衆国  
1953年06月09日夕刻

1 うれしいことに、そうした出来事を耳にできるのです。

さて、私がここを離れてしばらく経ったあと……あなたがた牧師の方々の教会で、「あれが急に自分から離れたんです」と証しする人々が現れることでしょうか。私が名前を呼べない人々がたくさんいます。彼らの上に、それ(癒しを妨げるもの)が覆いかぶさっているのが見えるのです。そして、この講壇と会衆のあいだ——ここに立つ人なら誰でも分かるでしょうが——その間は暗く見えるのです。

時には、動いているのが見えても、どの人かははっきり分からないことがあります。特に油注ぎの中にいるときは、視界が完全ではありません。そして、もしそれ(神の働き)がすぐに動かないと、別の場所へ移ってしまうのです。私は講壇に立ちながら、その存在を感じ、やがてそれが去り、人々の上に留まるのを見ます。その時、幻が開かれるのです。

これまでも、この場所に一度も立ったことのない人々が癒された例は何度もありました。彼らの名を呼んだこともないのです。ただ、礼拝の最後のあたりになると——まるで信仰の大波が一面に押し寄せてくるように——大きな信仰の崩壊というか、信仰の爆発が起こるのです。その中で、多くの人々が癒しを受け取ります。

あなたの癒しについて言えば、私は確信しています。キリストは、あなたがた一人ひとりのために死なれたとき、すでにすべての人を癒されたのです。ですから、あとはただ——あなたの信仰が、それを信じ取るかどうかにかかっているのです。

2 少し前のことですが、私が滞在している場所の近くまで、ある牧師が車でやって来られました。

彼は自分を紹介し、そしてこう言いました。「私も病の方々のために祈っています。ある重い病気の少女がいて……とても深刻な状態なんです」と。

私は言いました。「それなら兄弟、どうぞ集会にお越しください。今日は祈りのカードを配るかもしれません。」

しかしその日は、午後にはカードを配りませんでした。

すると彼は言いました。「ブラナム兄弟、私たちは祈りのカードが欲しいわけではありません。ただ、主がなされるわざを見たいのです。癒しに導かれるのは、主の靈感なのです。」

彼は正しいのです。その理解こそが大切なのです。癒しを受け取るために必要なのは、まさにその「靈感」なのです。主が何をなさっておられるのかを見て、主の御臨在を感じ取るところまで心が引き上げられるのです。

さて、あなたはご存じですか？ 神はある場所に現れ、そして別の場所にも現れ、またさらに別の場所にも行かれるということをご存じでしたか？

あまり「アーメン」という声は聞こえませんが(笑)、これは真理です。聖書にも「主の臨在がそこにあって、民を癒した」とありますね。

また、こうも書かれています。「主はモーセに道の途中で会われた」と。覚えておられますか？ そうです。モーセが出て行くとき、主は途中で彼にお会いになられたのです。

3 私の教会に一人の婦人がいました……ビーラー兄弟もご存じの方です。ウェバー夫人——彼女は結核で死にかけていました。すでに療養所で末期と診断され、もはや手の施しようがないと言われて、家に帰されたのです。ジェファソンビルにいたグレース・ウェバー夫人です。タバナクル(幕屋)のすぐ向こうに住んでいて、小さな子どもが五人か六人いました。

その夜、主の使いが私のもとに来て言われました。「ウェバー氏に伝えなさい。もうすぐ彼は一人残され、子どもたちの面倒を見なければならなくなる。妻は召される」と。

私は翌日、ウェバー氏のもとへ行きました。そしてそのことを伝えました。

また、その娘のジーン・ローズ——今では看護師をしている若い女性ですが、当時はまだほんの小さな

女の子でした——にも話しました。もう七年以上も前のことです。私は言いました。

「ジーニー、あなたのお母さんはまもなく天に召される。もう長くは生きられないんだよ」と。

4 それから二日、いや三日ほど経ったころ、政府の倉庫(彼女が働いていた職場)から数人の女性たちが彼女を訪ねてきました。

グレース——つまりウェバー夫人——は言いました。「もう一度だけでも、ビル兄弟(ブラナム兄弟)に祈ってもらえたら……」と。

彼女は続けて、「いとこのオパールががんで癒されたときのことを見たの。お医者さんは『朝までもたない』と言っていたのに、主が彼女を癒されたの」と語りました。彼女の娘もまた看護師でした。

ところが、職場のその女性たちはこう言ったのです。

「そんな人(ブラナム兄弟)のこと、信じられるものですか。あの人はただの偽善者よ。ああいう宗教なんて、結局は作り物の狂信よ」と。

するとウェバー夫人は、穏やかだけれどもはっきりとした声で言い返しました。

「いいえ、私は今、死にかけているけれど、そんなことは絶対に黙って聞いてもらえません。」

そしてこう続けました。

「私はずっとこの町で生きてきました。あの人(ブラナム兄弟)が子どものころから、どんなふうにも歩いてきたかを見てきました。あなたがたが偽物だと言いたいなら言えばいい。でも私は、あの方を通して神がどれほど多くの人を癒してこられたか、この目で見てきたんです。」

「そして私はあの方の生き方を知っています。あれは本物です。真理なんです」と。

5 その時のことです。主の使いがその会話を聞いておられたのです。

その夜、午前三時ごろ、私は目が覚め、水を飲もうと立ち上がって部屋の椅子に腰を下ろしました。すると、そのときでした——主の使いが扉を通して歩いて来られるのを見たのです。

そしてこう言われました。

「明日、すなわち日曜日に、ウェバー夫人は車で連れて来られる。彼女はタバナクルの右側、後ろの方の席に座るであろう。わたしは彼女の言葉を聞いた。彼女に伝えなさい——“主は確かにその言葉を聞かれた。そして主はこう仰せられる。『彼女は死なず、生きるであろう』”と。」

その通りになりました。もう七年ほど前のことです。今でも、行って確かめることができます。

ご覧の通りです。主の御臨在が、そこにあつたのです。彼女が真理のために立ち上がったとき、主はその場所におられ、彼女を見つけられたのです。そして主は、彼女があの方の女性たちに語った言葉を私に告げ、神を代表するものに対して示した敬意のゆえに、彼女を顧みられたのです。

ですから、神はあなたにも同じことをなさいます。

私という人間にではなく、キリスト——あなたの癒しのために死なれたお方——に対して敬意を払いなさい。もしあなたが主とその御言葉に心からの敬意を示すなら、神はあなたのために御業を行われます。アーメン。それは真実です。

6 さて、今夜は少し、御言葉からお話ししたいと思います。

今日の午後もすでに少し説教しましたが……[テープの切れ目]……そのとき主が言われたのです。「彼は心臓発作で倒れる」と。私は幻の中で父が降りてきて、地面に印をつけ、「ここがおまえの兄弟の行く場所だ」と教えてくれました。私はその場所をはっきりと見ました。

その兄弟は、ほんの少し前まで、まったく健康で、力もあり、何の問題もなかったのです。ところが数日前、突然テーブルの上に倒れ、心臓発作を起こしました。今は……ほとんど息も絶え絶えです。

そして、祈っても無駄なのです。彼の時はすでに定められており、彼自身もそれを悟っています。彼は行くのです。私の実の兄です。

もし私が「癒し主」なら、当然、彼を癒したいと思うでしょう。自分の兄なのでから。

けれども私は癒し主ではありません。そして、もし何か励ましの言葉をかけられるならそうしたいのですが、神が私に示されたことは一つだけ——彼は死ぬ、ということです。

そしてその通りになります。これは真実です。

ですから考えてみてください。もし私が癒し主であるなら、神もご存じの通り、私は真っ先に自分の兄を癒したでしょう。ええ、間違いなくそうします。

しかし、私にはそれができません。

私にできるのはただ一つ——神が私に語られた通りに、そのメッセージを届けることだけです。

もしかすると、古のヒゼキヤ王のように、彼が壁に顔を向け、涙を流して神に祈り、神がその祈りを聞かれて日を延ばされることがあるかもしれません。

けれども、それは私には分かりません。それは彼と神との間のことです。

私にできるのはただ、神が語られた通りの言葉を、忠実に伝えることだけなのです。

7 さて、今夜は列王記下から少し読んでみたいと思います。

ところで皆さん、昔ながらの「サッサ fras の香りがするよな、とうもろこしパンと豆の説教」がお好きですか？(笑)私はあの古き良きスタイルが大好きなんです。私は大した説教者ではありませんが、昔ながらのやり方しか知りません。そして、それが私を救ってくれました。だから皆さんにも言いたいのです——それはあなたにも良いのです。それがあなたを救ってくれます。飾り立てたり、見た目を白く塗るようなことはしませんが、魂を真っ白に洗ってくれます。アーメン、その通りです。

私は「古き良き、森の中の空のように澄んだ、罪を滅ぼす信仰」というものを信じています。そうです、それが真理です。それは私たちをみなキリスト・イエスの中でひとつにしてくれます。

それは、絹のドレスを着た婦人と、木綿のワンピースを着た婦人が互いに腕を取り合い、「姉妹」と呼び合うようにします。

それはまた、タキシードを着た紳士と作業着の男が抱き合って「兄弟」と呼び合うようにします。そうです、これが本当の福音です。

それはジョン・ウェスレーを救い、ドワイト・ムーディーを救い、サンキーを救い、フィニーを救い、ノックスを救い、そしてパウロ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ……彼らみんなを救った信仰なのです。

だから、私にとってもそれで十分です。それでいいんです。

8 さて、それでは、列王記下3章の10節から少し読みましょう。

いくつかの聖句を取り上げてから、すぐに癒しの祈りに入りたいと思います——もともと、「癒しの列」はカルバリー(十字架)にあるのですから、私たちはただ、病める人々のために祈るだけです。

この箇所は、イスラエルの歴史の中でも大きな転換点のひとつです。ちょうど今の時代のように、国が分裂し、人々が不満と混乱の中にあつた時代です。では聞いてください。

イスラエルの王は言った、「ああ、主はこれら三人の王を召して、モアブの手に渡そうとしておられるのだ!」

しかしヨシャパテは言った、「ここに主の預言者がいないだろうか。その方を通して主に伺おう。」

するとイスラエルの王の家臣のひとりが答えて言った、「ここにシャファテの子エリシャがおります。彼はかつてエリヤの手に水を注いだ者です。」

ヨシャパテは言った、「主の言葉は確かに彼とともにある。」そこでイスラエルの王とヨシャパテとエドムの王は彼のもとへ下って行った。

エリシャはイスラエルの王に言った、「私があなたと何の関わりがあるのか。あなたの父の預言者や母の預言者のところへ行きなさい。」

しかしイスラエルの王は言った、「いや、主はこの三人の王を召して、モアブの手に渡そうとしておられるのだ。」

エリシャは言った、「私が仕える万軍の主は生きておられる。もしユダの王ヨシャパテの御顔を重んじなければ、私はあなたに目を留めることも、見ることもすらしなかつただろう。」

「今、琴を奏でる者をここに連れてきなさい。」

そして琴の奏でが始まると、主の御手がエリシャの上に臨んだ。

彼は言った、「主はこう仰せられる。この谷に多くの溝を掘れ。」

「主はこう仰せられる。風も見ず、雨も見ないが、それでもこの谷は水で満たされる。あなたがたも、家畜も、獣もその水を飲む。」

「これは主の目には小さなことにすぎない。主はモアブ人もあなたがたの手に渡される。」

「あなたがたはすべての堅固な町、すべての良い町を打ち滅ぼし、良い木をことごとく切り倒し、水の泉をふさぎ、肥えた地を石で損なえ。」

「そして朝になり、穀物の供え物がささげられたとき、見よ、エドムの方から水が流れてきて、その地は水で満たされた。」

——アーメン。

主の御言葉はいつの時代も変わりません。

あのと時のイスラエルのように、私たちの時代もまた、決断を迫られています。

主の臨在が共にあるなら、乾いた谷にも命の水が満ちるのです。

9 では、しばらくの間、頭を垂れて祈りましょう。

天の父なる神よ——信仰は聞くことから、聞くことは御言葉によって来ます。

今、私たちはこの大いなる出来事を御言葉の中に読みました。

どうか今夜、ここに集まった人々が、かつて預言者たちと共におられた同じ神が、荒野を旅したイスラエルの民と共におられた神が、

獅子の穴の中のダニエルと共におられた神が、

火の炉の中に投げ込まれた三人の若者たちと共におられた神が、

そして時代を超えて使徒たちと共におられた神が、

今もなお生きておられる同じ神であると信じています。

主よ、どうか今、その御手からの祝福をお与えください。

私たちは貧しく、取るに足りない者たちですが、

主を必要としている子どもたちです。

主の御前にへりくだり、

自らの罪を告白し、赦しを願います。

もし私たちのうちに、またこの集会の妨げとなるような、  
疑い、不信仰、あるいは誤った思いがあるなら、  
主よ、どうか今、完全にお赦してください。  
どうか聖霊がこの集会の中で、自由に働かれますように。  
ここにいる人々を祝福し、  
病める者を癒し、  
罪人を救い、  
すべてのことを通して主の栄光があらわれますように。  
これらを、主イエス・キリスト——  
あなたの愛する御子の御名によってお祈りいたします。アーメン。

10 (録音に破損) そのころのユダの王はヨシャパテで、イスラエルとユダはすでに分裂していました。

そしてこの分裂というものは、今日の教会にも似ています。教会が分かれたままでは、真の一致は決して生まれません。

アメリカの先住民たちは、白人たちにこの地を奪われましたが、その最大の理由は、彼ら自身が一つにまとまっていなかったからです。部族ごとに争い合い、統一されていなかったのです。もし彼らが心を合わせて立ち上がっていたなら、この地を守ることができたでしょう。

私は時々、心から気の毒に思うのです。真のアメリカ人はインディアンたちです。私たちではありません。私たちは移民にすぎません。神がアメリカを造られたとき、そこに最初に置かれた民——それが彼らなのです。

最近、ニューメキシコ州カールズバッド近くで彼らのために集会を開きました。部族の名前を失念しましたが、アリゾナ州サンカルロスのアパッチ族でした。あの夜のことは決して忘れません。インディアンの方々のために祈ったのはその時が初めてでした。

二人の方が祈りの列に来られ、主が彼らの状態を啓示されました。私は祈って言いました。「主よ、もしあなたが彼らを癒してくださいなら、私は必ず保留地へ行きます。」主はその祈りを聞いてくださり、癒しが起こりました。そして宣教師の助けを得て、私は実際に保留地へ行きました。

その晩、二万人以上の人々が集まっていました。小さな教会の前に、私たちが今いるような簡単なステージが生まれ、投光器が灯されていました。辺りには小さな焚き火が点々と燃え、インディアンの人々が毛布に腰を下ろし、小さな赤ん坊(パプス)たちを囲んで座っていました。年配の方々は長いパイプをくゆらせ、静かに語り合っていた——その光景は、これまでに見た中で最も美しいものでした。

11 私が話をしようとしたときのことです……インディアンという人たちは、とても独特な気質を持っています。彼らはあなたの話をじっと聞いていますが、自分の中で確信が持てるまでは決して決断しません。

ビリー・ポール(私の息子)も、以前そのことで面白い体験をしました。

私は彼に言いました。

「ビリー、祈りのカードを配るときは、本当に病んでいる人に渡すんだよ。ちょっとした頭痛とか、歯痛の人じゃなくて、がんで苦しんでいるような、本当に助けを必要としている人にな。」

ビリーは「わかりました」と言いました。

それはフェニックスでの集会の時でした。

ビリーが祈りのカードを配っていると、ひとりのインディアンが近づいてきて、彼の背中を軽く叩いて言いました。

「ミー、シック(病気)」と。

ビリーは尋ねました。「どうしたんだい、チーフ？」

するとその人はただ、「ミー、シック」と繰り返しました。

ビリーは首をかしげてその場を離れたのですが、その酋長は後ろ手を組んで、じっとついてきました。

祈りのカードがどんどん少なくなっていくのを見ていたのです。

やがてまた背中を叩いて言いました。「ミー、シック。」

ビリーが振り向いて言いました。「チーフ、私はこのカードを本当に病気の人に渡すように言われているんだ。何の病気なんだい？」

するとチーフはやっぱりこう言いました。「ミー、シック。」

そしてまた少し進むと、チーフは三度目に彼を捕まえました。もう残り二、三枚のカードしかありませんでした。

「チーフ、今度こそ教えてくれ。どこが悪いんだ？」

チーフは再び、「ミー、シック。」

ビリーはついに笑って言いました。

「じゃあ、このカードに『ミー・シック』って書いておくよ。」

それがその人のすべての言葉だったのです。おそらく誰かに「そう言えばいい」と教えられたのでしょう。彼にはそれ以外の言葉がなかったのです。

以前、あるインディアンが救われたときのことも思い出します。

彼は「賛美の叫び方」を知らなかったのです。

彼の知っている英語は、わずか二つの単語——“July(七月)”と“August(八月)”だけ。

それで彼は走り回りながら、できるかぎりの声で叫んでいました。

「July! August! July! August!」と(笑)。

それしか言えませんでした。それでも彼は私たちが「ハレルヤ!」と叫ぶのと同じくらい、心の底から主を讃えていたのです。

そう、それはまぎれもなく神の栄光のための叫びでした。

彼にはそれしか知らなかったけれど、それで十分だったのです。

## 12 そのサンカルロスでの集会の夜、私はこう話しました。

「皆さん、私は本当に心が痛むのです。アメリカが国旗に誇りを持ちながらも、他国——たとえばイギリスなど——にお金を送っているのは、ある意味で旗に汚点を残すことだと思ふのです。なぜなら、そのお金は本当に貧しい人々の手には届かないのです。」

私は民主党員でも共和党員でもありません。ただのクリスチャンです。けれども、はっきり言わせていただきます。それはナンセンスです。私はその目で見てきました。国王からの招きで宮殿にも行きましたが、人々は飢え、命をつなぐのがやっとでした。

送られた資金は民のために使われていないのです。やがてロシアがそのお金を使って、まるで日本がかつてそうしたように、再びアメリカに向けて報復してくるでしょう。

ですから、兄弟たち、私は「アメリカをアメリカのために」守るべきだと思うのです。アメリカは本来、そうあるべきなのです。

そして、私がああの保留地に行ったときのことを思い出します。

地面に横たわるインディアンの人々——中には毎年何百人も、凍死や餓死で命を落としています。彼らは月にほんの数ドルの年金しか受け取れず、それでは到底生きていけません。

それでも彼らは羊を育てていましたが、その羊さえも取り上げられてしまったのです。

私はその悲惨な現状を目の当たりにしました。飢え、寒さ、病気……。

これは国家としての恥だと思えます。

私は心から言います。——私はインディアンの味方です。

13 それで私は彼らにこう言いました。

「私はこの状況を変える力を持っていません。私はただの一人の人間です。けれども、私たちの先祖があなたがたを押しつけ、あなたがたの土地を奪い、狩りの場を取り上げてきたのです。そして正直に言います、白人はもともと殺戮者の性質を持っていました。バッファローを撃ちに出て行っても、食べるためではなく、『どれだけ殺せるか』を競うためだったのです。」

私は続けました。

「それが現実なのです。私はインディアナ州で七、八年ほど猟区監視官(ゲームワーカー)をしていました。だからよく分かっています。白人というのは——悔い改めていない限り——ただの殺戮者です。手に入るものは何でも殺してしまう。撃つことそのものが目的なんです。」

その言葉は少し厳しく聞こえたかもしれませんが、けれども、兄弟たち、私はここで福音の真理を語っているのです。これは事実です。

もし法で「リスは五匹まで」と決まっても、彼は六匹、七匹、八匹、十匹と、捕れるだけ捕るでしょう。それが彼の本性です。

しかしインディアンは違います。もし二匹捕まえて、一方が大きく、もう一方が小さければ、小さい方を逃がすのです。必要な分だけを取り、自然を守るのです。

彼らこそ本当の「自然保護者(コンサベーションリスト)」なのです。

14 それでも私は言いました。

「あなたがたは押しつけられてきた。何度も、何度も、そうしてきたのです。

あなたがたは不当な扱いを受けてきました。けれども——私はそのことを変える力を持っていません。私はこの国の法律を決める者ではありません。

しかし今夜、私はあなたがたに“本当の正義をもって扱ってくださる方”について話したいのです。

それは、神の御子イエス・キリストです。」

私は続けました。

「主イエスは、ほかの誰のためとも同じように、あなたがたのためにも死なれました。あなたがたを救うために、命を捧げられたのです。もちろん、今この話をすぐには信じられないかもしれませんが、でも——もし神ご自身が、私の語っていることが真実だと“証明”してくださるなら、そのときは、もはや疑う余地はなくなるはずです。」

それから、私は祈りの列を呼びかけました。

しかし、通常、祈りのカードを配らずに列を作ろうとすると、たちまち混乱が起こるものです。

けれども、その夜はカードを用意していませんでした。

私は言いました。

「カードはありませんが、今夜、祈ってもらいたい人がいるなら、手を挙げてください。」

通訳はたった一人しかおらず、誰も手を挙げませんでした。

それで私はもう一度呼びかけました。

「祈ってもらいたい方は、この列に並んでください。」

それでも誰も動かないのです。

すると宣教師が小さな教会の中へ戻って行き、そこにいた女性たちを連れて出てきました。

彼女たちが次々と出てきて、ようやく列ができ始めたのです。

15 皆さん、インディアンの赤ちゃんたちは本当に可愛いのです。

小さな体で、まるで宝石のように輝いていました。

でも不思議なことに、彼女たちはその赤ちゃんたちを木の杭のようなものにずらりとかけておくんです。

どの子もまったく同じような顔をしていて、私にはどうやって自分の子を見分けているのか、まったく分かりませんでした(笑)。

それでも、母親がやって来てひとりを抱き上げ、背中にくくりつけると、その子は泣くこともせず、静かにじっとしているのです。

私はそのうちの一人を抱いて少し遊んでいました。

やがて、一人の女性が祈りの列を通してやって来ました。

私は彼女に少し話しかけようとしたそのとき、すぐにわかりました——彼女は性病を患っていたのです。けれどもそれは、不道德のせいではありません。彼女が「生きるために」そうせざるを得なかったからです。

私は言いました。「この方は性病です。」

通訳が私を見て驚き、その黒い瞳が鋭く光りました。

彼女は病気の女性を見つめ直し、こう尋ねました。

「本当にそうなのですか？」

女性はうなずきましたが——どうして私がそれを知っているのか、不思議そうでした。私は説明しました。

「彼女は不道德な人ではありません。立派な女性です。

ただ、彼女の置かれた生活環境が、そうさせてしまったのです。」

それでも病気は確かに性病でした。

やがてその女性は通訳に尋ねさせました。

「神様は私を癒してくださるでしょうか？」

私は答えました。「はい、信じるなら、神は癒してくださいます。」

そして、彼女のために祈りました。

その次に来たのは——目の病、緑内障を患った方でした。

この病気はインディアンの間では非常に多く見られるものでした。

16 次に祈りの列にやって来たのは、小さな女の子でした。

その子は耳が聞こえず、言葉も話せませんでした。

私は母親に向かって言いました。

「このお子さんは耳が聞こえず、話すこともできませんね。以前、高熱を出したことがあって、そのときから耳が聞こえなくなり、声も出せなくなったのです。」すると母親はすぐにうなずきました。

「その通りです。本当にその通りです。」

私は尋ねました。

「あなたは神様がこの子を癒してくださると信じますか？」

母親は涙ぐみながら、「はい」と言いました。

それで私は主に祈りました——「主よ、この幼い子を癒してください」と。

祈り終えたあと、私は指を「パチン」と鳴らしました。

すると、その小さな女の子が振り向いたのです。

私は言いました。「聞こえるのかい？」

通訳がそっと声をかけました。

そして——彼女は聞こえたのです。

さらに、口を開いて言葉を発し始めました。まだおぼつかない声でしたが、確かに言葉でした。

私は微笑んで言いました。

「もう少ししたら、もっとはっきり話せるようになりますよ。」

すると通訳がにっこりして言いました。

「ううん、もう十分よく話してるわ(Her talk heap good now)！」

その場には、喜びと涙が広がりました。

神が生きておられることを、皆がその瞬間に見たのです。

17 次に列にいたのは、少し斜視の小さな男の子でした。誰の目にも、彼が斜視であることはすぐにわかりました。けれども、私はこれまで、神が斜視の子どもを癒やされなかったということを一度も見たことがありません。——一度も、です。

私がお子を見たときに感じた強い「痛み」のような思い——それには、理由があるのです。ずっと昔、私の小さな娘、シャロンが病院で息を引き取ろうとしていた時のことを思い出したのです。あの子は本当に苦しみました。やっと私が駆けつけたときには、その小さな青い目が、交差してしまっていたのです。それ以来、斜視の子を見るたびに、胸が締めつけられるような思いをします。

……花の香りを得るためには、時にその花をすりつぶさなければならない、そうでしょうか？

その小さな子は、粗い馬のたてがみのような髪を垂らして、赤らんだ顔で私を見上げました。私はそっとその子を抱き上げました。

「もし神がこのインディアンの人々の前でこの子を癒してくださるなら、それはきっと恵みのしるしとなるだろう」——そう思いながら、私はその子を胸に抱き寄せました。

「親愛なる神よ、どうかあわれみをお示してください。この小さな子を癒してくださいますように。そして、あなたの愛する御子について、ここにいる人々に語るができるよう、恵みをお与えください。」

通訳はそれを訳してはいませんでした。人々はただ静かに見守っているだけでした。しかし、私は確信していました——神がすでにその子を癒されたことを。

私は言いました。

「さあ……この子を私の肩から下ろす前に、みんな、こちらを見てください。」

人々は顔を見合わせながら、私の方を向きました。

私は言いました。「もし神がこの斜視の小さな男の子を癒してくださったなら、あなたがたは信じますか？」

彼らは互いに顔を見合わせましたが、誰も言葉を発しませんでした。

私はその子の顔をゆっくりとこちらに向けました——その時、その小さな目は、まるでこの誰の目とも変わらぬほど、まっすぐで正常になっていたのです。

ああ……祈りの列というものが、まさにそこから始まりました。まるで群衆が一斉に押し寄せるようで、砂煙が立ち上がるほどでした。

列を整えるために、通路を空けなければならないほどでした。

皆さんの中にはご存じの方もおられるでしょう——ジャック・ムーア師やゴードン・リンゼイ師、その方もそこにおられました。

そして、その祈りの列が続いていったのです。

18 次に来たのは、年老いたインディアンの女性でした。

彼女を静かにさせるのに、人々はずいぶん苦労していました。手には二本の棒——箒の柄のようなものに、上の方を布でぐるぐる巻いて作った杖をつけていました。年の頃は七十五か、八十ほどに見えました。長く編まれた髪が垂れ、その中には革紐が編み込まれていました。

彼女は次の順番だったのですが、人々が押し合いへし合いして壇の前に殺到してきたため、何人かのインディアンの男たちを壇上に立たせて、群衆を押しとどめていたのです。

そのとき、ひとりの若いインディアンの少年が壇の上に飛び乗ってきました。

「次は自分の番だ」と思ったのでしょう。けれどもムーア兄弟には、その少年に「戻りなさい」と言えなかった。ムーア兄弟は小柄でがっしりしたアイルランド系の方でした。彼はその少年を両脇の下からそっと抱え上げて、後ろに戻してやり、年老いたその女性が進み出られるようにしたのです。彼女の順番だったからです。

やがて彼女が壇の前まで来ました。

ああ、なんと痛ましい姿だったでしょう。彼女はその杖を前に突き出しながら、重い関節炎に苦しんでいました。

——神よ、この方の古びた心に祝福を。いつか栄光の御国で再びお会いしたいものです。

彼女がすぐ目の前まで来たとき、その深い皺が刻まれた顔を上げました。

ああ、あの顔——まさに母の顔でした。長い年月、荒れ果てた砂漠のような人生を歩んできたのでしょう。涙がその皺の間を伝って流れ落ちていきました。その涙の跡は、幾度となく赤ん坊をあやし、わずかな糧を分け合って生きてきた日々を語っていました。

彼女は私を見上げ、唇を震わせながら、かすかに微笑みました。そしてまばたきをしながら、片方の杖を手に取り、もう片方を私の手に差し出しました。

その瞬間——彼女はまっすぐと体を伸ばし、杖なしで壇を降りて歩き出したのです。

祈りを受けたわけではありませんでした。誰も彼女のために祈ってはいません。

それでも——彼女は癒されたのです。

神が、彼女の信仰に報いてくださったのです。

19 その集会のことで、もう一つだけお話しさせてください。

夜も更けて、午前三時ごろになっていました。私は外の方に目をやると、インディアンたちが次々とやってくるのが見えました。体の上の方までびっしょりと濡れています。「どうしたんですか？」と私は尋ねました。

通訳が言いました。「最初は、みんな信じていなかったんです。でも……」

今は、自分たちの愛する者たちを砂漠の奥から背負って運んできているんです。川を渡る浅瀬はずっと下流、ここから二十マイルも先なんですけど、もう待つてはいられないんです。みんな直接この川を渡ってきているんですよ。」

私はその言葉を聞きながら、列の方を見ました。

すると、ひときわ大きな男が立っていました。

がっしりした体つきのインディアンで、唇は真っ青。砂漠の朝は冷え込みますからね。寒さに震えていました。彼の手には、大きな板があり、その板には二本の棒が交差するように取り付けられていました。その上には年老いたインディアンの男が横たわっており、両手をその棒にかけ、足ももう一本の棒に引っかけていました。男はその板ごと背負って運んできていたのです。担架なんてない。

ただ、ありあわせの板と棒で即席の担架を作っていたのです。

私は言いました。「英語が話せますか？」

男は答えました。「ちょっとだけ。」「こんなに濡れて……肺炎になったら

どうするんですか？」と私。「大丈夫。イエス・キリストがわたしを

守ってくださる。わたしは父を連れてきた。」

「そうか。」私は言いました。「もし私がイエス様に、あなたのお父さんを癒してくださるようお願いしたら、そうしてくださると信じますか？」

「うん。それが目的で連れてきた。」「では、通してあげてください。」

男が通り過ぎるとき、私はその老人の上に手を置きました。

「親愛なる神よ。この老いた父、長い年月を重ね、今ここに横たわり、震え、手足の自由もきかない——どうかあわれんでください。イエス・キリストの御名によって、この方を癒してくださいますように。」

それから私は言いました。「さあ、行きなさい。あなたが信じたとおりになりますように。」次の人が来ました。私は疲れ果てて、立っているのもやっとでした。

そのとき、どこからか叫び声が聞こえてきました。

見上げると、さっきの老人が、自分でその板を肩に担いで歩いているのです！

みんなに手を振りながら、まっすぐに歩いている。

ああ、なんと単純な信仰でしょう。でもね——人はどうしても

「どうやって起こったのか」と頭で考えようとする。

だからこそ、見逃してしまうんです。

彼らはただ、信じたのです。それだけのことです。

- 20 これこそが「信仰の単純さ」なのです。けれども、イスラエルはこの時代、神から遠く離れてしまっていました。

信仰——それは非常に稀なものとなっていたのです。

その時、一人の正しい王がおりました。

ユダの王、ヨシャパテです。彼は主の御前に正しく歩む人でした。

そして彼は、北の王アハブのもとへ上って行きました。

アハブ——皆さんもご存じの通り、彼は悪名高い王でした。

預言者エリヤが彼に対して預言しました。あのナボテのぶどう畑の件です。

アハブの妻イゼベルが、正しい人ナボテを殺し、その畑を奪い取りました。

そのとき、神から遣わされた預言者エリヤがアハブに言いました——

「犬があなたの血をなめるであろう。」

義なる人を欺き、その所有を奪ったその罪のために、

神はこのような宣告を下されたのです。

やがてアハブが死に、その跡を息子のヨラムが継ぎました。

しかし彼もまた、非常に邪悪な王でした。

母イゼベルの偶像——その偶像礼拝をなおも続けていたのです。

イゼベルは小さなエジプトの王女であり、イスラエルの信仰を持たぬ

異邦の娘でした。このように「信じぬ者との結婚」こそが、

墮落の始まりだったのです。皆さん、これは昔話ではありません。

あなたの家庭においても同じです。

信仰を持たぬ者と結びつけば、そこで勝利は失われるのです。

——信仰が混じり気を持つとき、そこに敗北が忍び寄るのです。

- 21 よく聞いてください。

ヨシャパテは、その不信仰な者——アハブの子ヨラム——と同盟を結んでしまいました。

なんという過ちでしょう。

信じない者と手を結ぶ——それは彼にとって致命的な失敗でした。

これは、かつて私たちの国が戦争中にロシアと同盟を結び、飛行機や兵器を渡した時と同じようなことです。

今や彼らは、それを私たちに向けて撃とうとしているのです。

「二人が心を合わせなければ、ともに歩むことはできない」——聖書はそう語っています。

私たちは、十字架のキリストを受け入れようとしなかった。

そして今——二重の十字架を背負わされているのです。

まったく、その通りです。

同じことが、あの時代にも起こりました。

ヨシャパテはヨラム王と手を組み、エルサレムの王国から出て行きました。

そして彼らは、ペリシテ人——いや、モアブ人の王たちと戦うために出陣したのです。

けれども、彼らは七日間も荒野をさまよい——神に尋ねることを一度もしなかったのです。

そうです、すべてが「人の思惑」で結ばれていた。

神に尋ねず、自分の計画で動いたのです。

皆さん、今夜この集会に来られた時……

あなたが病んでいるなら、こう祈って来られましたか？

「父よ、今夜、私はあの場所へ行きます。

どうか憐れみをもって、私の信仰を高めてください。

御子イエスを信じ、癒されるところまで、私の信仰を引き上げてください。」

そのように祈って来られましたか？

あるいは、コナーズビルでこの集会があると聞いたとき、

ご近所に声をかけて、小さな祈り会を開かれましたか？

……そういうことを、私たちはつい忘れてしまう。

だから、問題が起こるのです。

神を相談しないから、信仰を働かせないから——

そこに、つまずきが生まれるのです。

## 22 彼らは七日間、荒野をさまよいました。

方位を定める羅針盤(コンパス)も持たずに、ただ進んで行ったのです。

そして、気づいた時には——困難の中にいました。

神に伺いも立てずに進んだため、水の供給がすべて絶たれてしまったのです。

それが、今夜の教会に起こっていることです。

霊的な“水の供給”が、断たれてしまっているのです。

教会を超自然の力抜きで運営しようとしている——

神の霊の導きではなく、“自然的な力”だけで続けようとしている。

世の教会の真似をして形ばかりを整えようとする——

だから、かつてのような祝福が流れないのです。

ある人がこう言いました。

「もしまた、あの古き良き“聖霊のリバイバル”があるなら、

私は裸足で五十マイル、石畳の上を歩いてでも行くだらう。」

どうして今、それが起こらないのか？

——神は、今も変わらない神です。

問題は、私たちが神に相談していないのです。

祈っていないのです。

それこそが唯一の道です。

私たちは昔、こういう小さな賛美を歌いましたね。「祈れ、祈れ、高き地を目指すただひとつの道。祈れ、祈れ、信仰の祈りは神の祝福を引き下ろす。」

そうです。それこそが——唯一の道なのです。

23 さて——彼らは神に伺いも立てずに出かけて行き、その結果、

水の供給が絶たれてしまったのです。

荒野の真ん中で、渇きに苦しみ、命の危機に瀕していました。

その中の一人にだけ、なおも神を思い出すだけの「信仰の残り火」

がありました。それがユダの王、ヨシャパテでした。

彼は正しい人であり、こう言いました。

「主の預言者は、このあたりにおられないのか？」

私たちがこの事について、主に伺うことができる人は？」

——けれども、それを思い出すには、あまりにも遅かったのです。

聖書は言います。「まず神の国とその義を求めなさい。そうすれば、

これらのものはすべて与えられる。」そう、“まず”です。

けれど彼らは最後になってようやく気づいたのです。

ヨシャパテが言いました。「どこかに、主の御言葉を語る者はいないのか？」

すると、ひとりの従者が答えました。

「はい、ここにエリシャという人がいます。

彼は、エリヤの手に水を注いだ者です。」

ああ——そうですとも。神の人のそばに仕えるうちに、その“油そそぎ”

は必ず少しは染み込むものです。

24 ある晩のことを思い出します。

私はその時、こう言ったのです。

「皆さん、クリスチャンは罪人のそばに座りなさい。

信仰というのは天然痘のようなもので、そばにいと“うつる”んですよ！」

——と、冗談半分に話したんです。

ところが、その二日後の夜、同じ天幕集会でのことです。

当時はまだ、私はバプテストの伝道集会をしていた頃でした。

そこに一人の小柄な婦人が立ち上がりました。

髪はきつちりと後ろに撫でつけられ、顔はまるで剥いた玉ねぎのように光っていました。そして彼女は声高に言ったのです。

「私は、ある説教者がこう言うのを聞いたことがあります。

“信仰のある人のそばに座れば、それがうつる”ってね。でも——

感謝します、神様!そんなもの、私には“うつりません”でした!」

「私は他の人たちと同じように“代価”を払って、神から直接、受け取ったんです!」その瞬間、私は心の中で思いました。

「ああ、主よ……今は黙っていよう。」(笑)——そうです、その通りです。

信仰というのは“こすれてうつる”ものではありません。

自ら進んで、受け取る——その心がなければならぬのです。

25 さて、エリシャはエリヤの手に水を注いだ者でした。

なんという素晴らしい預言者でしょう。彼には、エリヤの二倍の霊が注がれていたのです。私はこの「エリヤとエリシャ」の型が大好きです。

少し“型”として見てみましょう。エリヤ——年老いた預言者——

それはキリストを表しています。エリシャ——若い預言者——

それは教会を表しています。

さて、彼らが共に歩み始めた時のことを思い出してみましょう。

エリヤがエリシャを見つけたとき、彼は畑で働いていました。

エリヤは自分の外套を取って彼の上に投げかけ、「わたしについて来なさい」と言いました。するとエリシャは、その時使っていた牛を殺し、

それで貧しい者たちのために祝宴を開き、そして——

エリヤに従ったのです。その後、エリヤが言いました。

「私はドタンへ行かなければならない。」

出発する前に、若い預言者に言いました。

「おまえはここに残っていなさい。」しかしエリシャは答えました。

「主は生きておられ、あなたの魂は決して死にません。

わたしは決してあなたを離れません。」

——私はこの言葉が大好きです。“とどまり続ける”——その忠実さです。

彼らはさらに進みました。そしてエリヤはまた言いました。

「今度は、おまえはここに残れ。私は預言者の学校に行かなければ

ならない。」——これが、二段階目の旅の始まりでした。

26 最初の段階——それはマルティン・ルター時代、信仰の旅の第一段階です。

次の段階は預言者の学校——すなわち第二の段階。

エリヤはそこでエリシャに言いました。

「今度はおまえはここに留まれ。主が私をヨルダンへ召されているのだ。」

けれども、エリシャは本物の預言者でした。彼は答えました。

「主は生きておられ、あなたの魂は決して死にません。

私はあなたを離れません。」——ああ、なんという忠実さでしょう！

神はいつの時代も、このように忠実な者を備えられるのです。

さて、エリヤは言いました。

「私はヨルダンへ行く。」

そのとき、預言者の学校にいた他の者たちがエリシャに言いました。

「あなたの師の頭(＝彼の霊)が、今日あなたから取り去られるのを知っていますか？」エリシャは言いました。

「知っています。けれども、静かにしていなさい。」

——そう、彼はこれから起こることをよくわかっていたのです。

だから、彼は師の後を離れず、共に歩きました。

そして彼らはずいにヨルダン川へとたどり着きました。

これは、まさに教会の完全な型です。

第一の段階——それは「義認」、すなわちルターの時代です。

ドタン——信仰による救いの始まり。

第二の段階——それは「聖化」、すなわちジョン・ウエスレーの時代です。

預言者の学校——きよめと訓練の時代。

そして今、彼らはヨルダンへ向かいます。

ヨルダン——それは死と、渡り越えることを意味します。

そうです。私たちは今、すべての教会時代を通り抜け、

“完全な移行”——死を越えて主の臨在へ入る時代へと進んでいるのです。

27 ここには、メソジストの方々も、バプテストの方々も、いろいろな教派の方が座っておられますね。

私は、どの方に対しても何の悪意も持っていません。

神が私の心をご存じです。皆さんは、どの教派であろうと、

私の兄弟姉妹です。そして私自身も、もともとはバプテスト教会

の一員なのです。けれども——私は、ある素晴らしいものを

見つけたのです。それを皆さんにお伝えしたい。

少しだけ、もう少し深いところにあるものを。

あなたは言うかもしれませんが、

「もっと深いものなんてあるのですか？」

——もちろんあります。

そして、まだもっと深い領域が、この先にも待っているのです。

ですから、どうか固定化されないでください。

形だけで止まってしまわないように。

古きイスラエルの旅路を思い出してください。

彼らはいつも、火の柱を見つめていました。

そうでしょう？そして、その火の柱が止まれば、彼らも止まり、

その場所の下に天幕を張り、火の臨在の下にとどまりました。

祭司が千人、火の柱を見張っていました。

そして、その火が動くたびに——

昼の十時であろうと、夜の十時であろうと、正午であろうと——

ラッパが鳴り響きました。イスラエルの民は、その音を聞くとすぐに、

天幕をたたみ、出発し、光に従って進んだのです。

——そうでしょう？その通りです。

28 どこであろうと、旅の途中、火の柱が行くところへイスラエルはついて行きました。火がこちらへ動けば、彼らもこちらへ。

あちらへ動けば、彼らもあちらへ。右へ行けば右へ、左へ行けば左へ。

彼らは常に光に従ったのです。さて、これはなんと美しい「型」でしょう。

最初の宗教改革の時代、ひとりの小柄な男——マルティン・ルター——

が聖書の光に目を開かれました。

彼は悟ったのです。「義人は信仰によって生きる」と。

そして火の柱は、あの1500年にも及ぶ暗黒時代から動き始めたのです。

ルターはその火の柱の動きを見て、福音のラッパを吹き鳴らし、その下に

集会を建てたのです。しかし——問題はそこにありました。

ルターはその後、「教会を組織化してしまった」のです。

……さて、これは少し耳の痛い話かもしれません。

でもね、兄弟姉妹、それはちょうど私の母がああ、たぶん今夜もここ

に来ているでしょう——私が子どものころの話です。

私たちは貧しくて、肉屋からもらった脂身の切れ端を鍋で煮詰め、

ラードを作り、それに粉を混ぜてホーケーキ(とうもろこし粉のパン)を

焼いていたんです。皆さん、それをご存じですか？

そして——毎週土曜日の夜になると、必ずひとさじのヒマシ油

(キャスターオイル)を飲まされました。

あれほど嫌なものはありません。思い出すだけでむかむかします。

私は鼻をつまんで言いました。「お母ちゃん、もうこれ飲めないよ。

気持ち悪くなるんだ。」すると母はこう言いました。

「坊や、それで気持ち悪くならなかったら、効かないよ。」(笑)そうです。

だから、今夜も同じことを言いましょ。

もしこのメッセージがあなたを少しでも“気持ち悪く”させるなら——

それは効き始めているということです。

よし。

29 神は、**組織**を通して働かれたことは一度もありません。

神が働かれるのは、人そのものを通してだけなのです。

聖霊は組織の上に降ったのではありません。

人の上に降ったのです——その通りです。

よく聞いてください。

最初に組織化された教会、それが母なる教会——カトリック教会です。

その後のできた教会たちは、皆その枝分かれ、つまりその子どもたちです。

しかし、「教会(Church)」という言葉の本当の意味は何でしょうか？

それは「呼び出された者」「分離された者」という意味なのです。

ここに大切なことがあります。ルター——彼もその“型”でした。

彼はやがてルター派教会を組織化しました。

けれどもある日——火の柱が再び動き出したのです。

ところが、ルター派はあまりにも組織化され、

儀式や形式に縛られてしまい、もはやその動きについて行くことが

できなかったのです。

30 その時、イギリスにひとりの小柄な人物がいました。

ジョン・ウェスレー——彼は火の柱が動くのを見たのです。

そして、彼もその光に従って進み、「**聖化**」を説き始めました。

ルターにはそれを説くことができませんでした。

なぜなら、彼は「義認(信仰による救い)」を宣べ伝える器として召されて

いたからです。しかし、ウェスレーは「きよめ」を説き、

再び火の柱のもとに進み出たのです。火はさらに前進したのです。

ところが、そのうちウェスレー派もまた、次第に組織化されていきました。

そして、「ウェスレー派メソジストでなければ仲間ではない」と

というような状態になっていった。そうでしょうか？

そこからまた、小さな流れが枝分かれしていきました。

そしてある日——火の柱はさらに先へと動き出したのです。

その光を見たのが、ペンテコステの人々でした。

けれども、ウェスレー派には「異言」や「聖霊の賜物」などを  
受け入れることができませんでした。

彼らはすでに教えの中でそれらに反対していたのです。

だから、動けなかった。組織があまりにも固く縛られていたのです。

そこで火の柱は彼らから離れ、ペンテコステの人々がそれに従って  
進んだのです。その通りです。しかし、今——どうでしょうか。

ペンテコステ派もまた、あまりにも組織化されすぎてしまった。

そして再び、火の柱が動いているのに、

今度は彼らがそれについて行けなくなっているのです。

——まったくその通りです。アーメン！

けれども、兄弟姉妹よ、

神の火は今もなお、動き続けているのです！

(——テープ途切れる)

……ええ、今もまったく同じように。

31 さあ、よく聞いてください。

組織化された教会——それは、モーセの型なのです。

律法を授けた人、律法の制定者モーセ。

けれども、そのモーセでさえ、あるとき自分自身を栄光化し、

神をあがめなかったため、

ヨルダンを渡って民を約束の地に導くことは許されませんでした。

そして今日の教会も、同じ過ちを犯しています。

自分たちを誇っているのです。

「私はアッセンブリーズに属している。」

「私はチャーチ・オブ・ゴッドの信者です。」

「私はこの教団、このグループの一員です。」

——それが、いったい何だというのですか？

まさにその通りです。それが真実なのです。

もちろん、どの教派にも良き人々はいます。

私たちはみな、兄弟姉妹です。だからこそ——その壁を取り壊しなさい！

見てください。そこには、最初から彼らと共に歩んできたひとりの男がいました。その名はヨシュア。彼はしるしと不思議の型でした。

そして彼こそが、ヨルダンを渡ることを許された人でした。

許されたのは、教会組織でも、宗派でもありません。

ヨシュアというひとりの人——神の霊によって導かれた者が、イスラエルの民をヨルダンの向こうへ導いたのです。

その通りです。アーメン！

32 さあ、もう一度、聖書の箇所に戻りましょう……。

今夜は、もうすぐでも“説教したくなる”ような気持ちです！（笑）

よく見てください。エリヤが旅に出た最初の段階——

それは、ルターの時代、すなわち「義認」の段階でした。

二つ目の段階——預言者の学校——これは「聖化」の時代、

すなわちジョン・ウェスレーの時代を表しています。

学校や組織、訓練、制度——それがその時代でした。

そして三つ目の段階——ペンテコステ——

これは「ヨルダンを渡る」段階、すなわち霊による満たしと力の時代です。

さて、エリヤがヨルダンに来たとき、

その目の前には川が立ちはだかっていました。

彼は自分の外套を脱ぎ、水を打ちました。

すると水は分かれ、彼は川を渡ったのです。

そしてエリヤは言いました

「さあ……（ああ、なんと素晴らしい言葉でしょう!）

今、おまえが渡ってきたなら、目を離すな。

これから先、何があっても、私を見続けるのだ。

すべてを断ち切り、世から離れた今私から目をそらしてはならない。」

しかし今日——私たちには“斜めの目をしたクリスチャン”があまりにも

多いのです。片方の目でキリストを見つめ、もう片方の目でこの世

を見つめている。やめなさい！

その片方の目を閉じて、ただ主だけを見上げなさい！

「隣の人がどう言うか見てみよう……」

「この人はこう言ってる……あの人は違う……」

そんなこと、何の意味があるのですか？

彼らはあなたを救えません。神だけが、あなたを救うのです。

だから、目を離さないでください——主だけに目を向けなさい!

33 彼らはヨルダンを渡りました。そしてエリヤは言いました。

「おまえは何を求めるのか?」ああ、もし今、少し時間があれば、この“養子の法則(Adoption)”についてじっくり語りたいところです。ペンテコステの信徒たちは、確かに「御霊によって生まれた者たち」です。そうです、それは真実です。けれども、その「息子」として生まれた者も、家族に正式に養子として迎え入れられる必要があったのです。

そこなんです——皆さんがしばしば見落としてしまっているところは、子どもが成長の時を迎え、養子として正式に認められる時が来るとき、もしその子を育ててきた家庭教師(tutor)が「この子はふさわしくない」と判断したなら、その子は確かに息子ではあるけれど——養子縁組の式にあずかることはできなかったのです。

けれども、その子が正式に「養子として認められる」と——彼は完全な権限と交わりの中に入るのです。

その子が小切手を書けば——それは父親の書いたものと同じ価値を持つのです。ハレルヤ!そして今日の教会も——

本来なら今、この養子の段階に入っていなければならないのです。神の恵みの中に、完全に立つ時です。けれども現実はどうでしょう? 私たちは上がったたり下がったり、出たり入ったり……。

神が何かを託そうとしても、私たちは安定しておらず、ほとんど何も任せていただけない状態です。

「今日はアッセンブリー教団の一員です。」「いや、明日はメソジストです。」

「次の週はバプテストです。」そんなふうには、教会の籍(ペーパー)をあっちこっちに持ち歩いているのです。どこかの教会に行けば、

「私は今バプテストです。」でも誰かに腹を立てたり、執事が気に入らなかつたり、牧師が気に食わないことを言うと、その“紙”を持って別の教会へ移る

——メソジストに。そこが合わなければ、またアッセンブリーへ。

アッセンブリーが合わなければ、チャーチ・オブ・ゴッドへ。

——あなたの持ち歩くその“信者証明書”は、もう擦り切れてボロボロです!

兄弟姉妹よ、

あなたの名を「子羊のいのちの書」に記してもらいなさい。

そして——そのことでもう悩むのをやめなさい!

アーメン。

私はブラナム家に四十四年間います。

けれども、家族から「入会してください」なんて言われたことは一度もありません。なぜなら——

私は生まれた時からブラナムだったからです！

同じように、あなたも——生まれながらのクリスチャンなのです！

ハレルヤ！あなたは「神の家族に入会」するものではありません。

**神の家族に“生まれ入る”**のです。——アーメン！

34 よく聞いてください。

エリヤは言いました——

「さあ、あなたは今、私に何を求めるのか？ 願うものを言いなさい。私はそれをあなたに与えよう。」

するとエリシャは、ためらいませんでした。

彼は恐れずに、まっすぐに答えました。

「あなたの霊の二倍の分け前を、私にください！」

——アーメン！ 私はこの大胆さが大好きです。

大きく求めなさい！

豊かに求めなさい！

偉大なことを信じなさい！

彼は言いました。

「あなたの霊の二倍を、私にください。」

するとエリヤは答えました。

「おまえは難しいことを求めた。だが、それでも——もし私が上げられるのを見るなら、その通りになるであろう。」

ああ、なんという約束でしょう！

エリシャの心には、ただひとつの思いしかありませんでした。

——「預言者から目を離すな！」

エリヤの姿が見えなくならないように、彼はずっと見つめ続けました。

山を登っても、谷を下っても、ただその姿を追い続けたのです。

そして、ついに彼らが丘の頂上に着いたとき——

天から火の戦車が降ってきて、二人の間を分けました！

エリヤはその戦車に飛び乗り、天に昇っていきました。

そして振り返りながら、自分の**外套(マント)**を脱いで、それをエリシャに投げ落としたのです。

火の車は天へ——外套は地へ——主の霊は、次の世代の預言者へ

と受け渡されたのです。

エリシャはその外套を拾い上げ、ヨルダンの岸に立ちました。

向こう岸には、預言者の学校の者たちが彼を見ていました。

「さて、あの若い預言者はどうするだろうか」と。

エリシャはその外套を両手に取り、

何度も何度もたたみながら、こう叫びました——「エリヤの神はどこにおられるのか!」そしてその外套で水を打つと——

ヨルダンの水は左右に分かれたのです。

彼は乾いた地を渡っていきました。

——ああ、なんという美しい型でしょう。

これは、教会の歩みそのものです。

ルター派の時代を通り、メソジストの時代を通り、ペンテコステの時代を超えて、

そして今——私たちはヨルダンを渡ろうとしているのです。アーメン。

35 イエスを見上げ続けなさい。目を離してはなりません。

よく聞いてください。イエス・キリストご自身が、教会の型なのです。

ある日、イエスが立っておられると、一人の母親が駆け寄って来ました。

そして言いました。「主よ、私の息子を——一人をあなたの右に、一人を左に座らせてください。」イエスは言われました。

「あなたは、わたしの飲む杯を飲むことができるか?」

彼女は答えました。「はい、主よ。」イエスは言われました。

「たしかに、あなたはそれを飲むことができる。

だが、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか?」

彼女は言いました。「はい、主よ。」すると主は言われました。

「たしかに、あなたはそれを受けるであろう。

しかし——右と左の座は、わたしが与えるものではない。

それは、天におられるわたしの父の御手にある。」

——ああ、なんという謙遜で、完全な秩序でしょう。

さて、主は弟子たちを集め、祝福し、

天に上られる前にこう言われました。

「エルサレムの都にとどまれ。

いと高きところから力を着せられるまでは、そこにとどまりなさい。」

そしてこうも言われました。

「わたしのするわざを、あなたがたも行うであろう。

それどころか、これよりもさらに大いなるわざを行うであろう。」そそうです!二倍の分け前が、教会に約

束されたのです。

それから彼らは二階の部屋(アッパールーム)に上り、

イエスが天に上げられるまで——

彼らはそこで待ち続けました。

そしてついに——

イエスの上に臨んだ同じ聖霊が、

あのペンテコステの民の上に降ったのです!

ハレルヤ! それこそが——二倍の分け前です!

36 いったい——どうしてだろう?

あなたがたは神の黄金の祝福の杯のふちに口づけると言いながら、

どうしてこのような時代に、じっと座っていられるのですか?

——ああ! 今、あなたがたの中には二倍の分け前があるというのに!

問います——イエス・キリストの上におられた神は、いまどこにおられるのか?

あの方は、人々の思いを知り、病を癒やし、

死人をよみがえらせ、盲人の目を開かれた——その同じ神です。

イエスご自身が言われました。「わたしのするわざを、あなたがたも行うであろう。わたしの受けたバプテスマを、あなたがたも受けるであろう。そして——二倍の分け前があなたがたの上に臨む!」ハレルヤ!

では——そのイエス・キリストの上におられた神はどこにおられるのか?

——ここにおられる!このインディアナ州コナーズビルのこの場所に、

今夜——この建物全体を覆うように——

同じ聖霊が動いておられるのです!問題は……

あなたがたがその臨在を感じているということです。

その聖なる存在がここにおられると分かっているのです。

それでも——

あなたがたは手放すことを恐れている!アーメン!

37 「そうです。」

従者たちは言いました。

「この人こそ、エリヤの手に水を注いだ者です。——本物の預言者です。」

そう、確かにそうでした。

彼は正しい交わり(よき師)のもとで育ったのです。

「さあ、彼を呼んでこよう。」

彼らは戦車に乗り、砂煙を上げてエリシャの家へ向かいました。

やがて、預言者の家の前に着くと——

エリシャが出てきました。

その顔には、少し怒りの色が見えました。

彼は周りを見渡し、そしてヨラムに言いました。

「おまえは、なぜここに来たのだ？」

おまえの母の預言者たちのところへ行けばよいではないか。

あのバアルの偶像のもとへ行けばいい。

なぜ、わざわざ私のところへ来たのだ？」

そしてさらにこう言いました。

「もし、ユダの王ヨシャパテの顔を立てなければ、

私はおまえの方など見ることもしなかつたらう！」

——あの預言者も、少し“頭にきていた”のです。

(説教者だって、そういう時がありますよ!)

「もしヨシャパテ王のことを敬わなければ、

私はおまえに一言も言わなかつたらう。

……だが、それでも——琴を奏でる者を連れて来なさい。」

彼は心を鎮める必要があつたのです。

怒りの熱を静め、再び霊の導きを受けるために。

さて——“**教会で音楽を使うのは間違っている**”と言う人たち、

この箇所をどう思いますか？琴を奏でる者が弾き始めると、

主の霊が預言者の上に臨んだのです！

ハレルヤ！もし音楽が預言者に聖霊の臨在をもたらしたというのなら——

今夜も、同じことが起こるのではありませんか！

同じ聖霊が、音楽の中を通して、

私たちの上にも——今ここに臨むのです。アーメン。

38 「さて、私はあまり音楽が得意ではありません。」

とエリシャは言ったようなものです。

「けれども、ここに十弦の楽器(心の豎琴)がある。

これで出来る限りの音を奏でてみよう。」

——そうです。あなたが言うかもしれません。

「でも私は預言者ではありません。」

いいえ、それなら——楽器のひとつになりなさい！

どこかで小さな音でも奏でなさい。何かをしなさい！

あなたの場所で、できることを。すると——

主の霊がその預言者の上に臨んだのです。

そして、霊が臨むと同時に、幻が開かれました。

彼は目を上げ、こう言いました。「主はこう仰せられる。この谷に溝を掘れ。

あなたがたは風も聞かず、雨も見ないだろう。しかし——主は仰せられる。

その溝は水で満ちるであろう。」

ハレルヤ! 兄弟よ、私はこう言います——

彼らはすぐに掘り始めたのです!

あの乾いた荒野の真ん中で。

「どうやって水が来るというのか?」それは神のすることです!

雨を降らせるのは神の務め。しかし——溝を掘るのは、あなたの務めです!

アーメン!

39 彼らは掘り始めました。

——スコップを取って、地面を打ち始めたのです。

誰かが言いました。

「まあ、私は小さな溝しか掘れませんが……」

預言者は言いました。

「深く掘れば掘るほど、水は多くなる!」

ハレルヤ! 今夜も同じです。あなたも“溝を掘りなさい”。

聖霊の水が、あなたの心を通して流れることができるように!

神の霊が動く“通り道”を、あなた自身の中に掘りなさい!

あの荒野で——モーセの時代に打たれた岩がありました。

そこから水が流れ出て、イスラエルの民を生かしたのです。

兄弟姉妹よ——その岩は、今もそこにあるのです!

そう、今夜も、その岩はここにおられるのです!

イスラエルの民がその岩から飲んだその同じ水——

その岩こそ、キリストご自身です。

聖書はこう言っています。「神はそのひとり子をお与えになったほどに、

この世を愛された。それは、御子を信じる者がひとりとして

滅びることなく、永遠の命を得るためである。」滅びの中にあつた人々——

しかし彼らは、打たれた岩から流れ出た水によって生きたのです。

そして今夜——

彼は再び「打たれた岩」として、滅びゆく人々のためにおられます。

それが、唯一のいのちの希望なのです。

完璧な型——そこにおられたのです、キリストが。アーメン。

40 でもね——問題はここなんです。あなたが「溝を掘り始める」と……

最初にスコップを地面に突き立てた瞬間、こんな声が聞こえるんです。

「十一献金(十分の一)を捧げなさい。」

するとあなたは言う。「ううん、それはちよつと無理です。」

——だから、水がほとんど出てこないんです。(笑)

でも兄弟よ、掘り続けなさい!そのスコップを止めるな!

古い疑いのかたまり、昔の空っぽの皿(dish pans)や

石ころ、岩、硬い心——そういったものを全部掘り出してしまふまで、

掘り続けなさい!

深く——もっと深く——掘り下げなさい!

そうすれば、ついに清らかな水が流れ出し、

あなたの魂を本当に潤すことができるようになります。

今夜の問題はこれです——

あなたは教会の壁の中に溝を掘ろうとしている。

でも、それじゃだめなんです!あれから離れなさい。

これからも離れなさい。そして——

キリスト・イエスの中に掘り進みなさい!ハレルヤ!

41 そして——翌朝になりました。彼らが目を覚ますと、谷に水が満ちているのが見えました。向こう側のモアブ人たちは、その水を見てこう言いました。

「おい、あれは血のように見えるぞ!」そうして、彼らは思ったのです。

「イスラエルの連中は、同士討ちしてみんな死んだに違いない!」

そして彼らが油断して攻めてきたその時——

イスラエルは立ち上がり、圧倒的な勝利を手にしたのです!

その日、イスラエルは敵の井戸をすべて埋め、

町々の城壁を打ち壊し、歴史に残るほどの大勝利を得ました。

兄弟よ!今夜、もしあなたが自分の人生の中にその溝を掘るならば、

そしてあなたの心の中にある汚れたもの——

神に属さないものをすべて掘り出して投げ捨てるならば——

そうです、不信仰を捨てなさい。

「博士がこう言っていた」とか「誰それがこう教えた」とか、

そういうものを全部掘り出してしまいなさい!



[www.messagehub.info](http://www.messagehub.info)

説教の語り手

ウィリアム・マリオン・ブラナム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7